# 空をかける翼

香枝ゆき

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

かつて地上に住んでいた人類は、空へと住みかを移す。しかし、空には先住民ヴァンパレット属がいた。

生きるため、バンパレット属と対抗するために人々は自衛組織「エンジェルガード」を創設する。

これは、エンジェルガードの隊長と、隊長に憧れて入隊した少年たちのものがたりである。

# 目　次

君を守るマゼンダ ―― 1
天使になりたかったわけ ―― 4
天国のありか ―― 7
天使なんかじゃない ―― 9
エンジェルレッスン ―― 12

# 君を守るマゼンダ

まるで草原だった。スカイナイトの新入隊員の制服は緑と決まっている。だから彼らが並ぶと春のような風景になるのだ。このような色をしているのは、初心者マークの名残という。

インナーのみ男女で分けられているのは、その昔助平な隊員が異性の更衣室へのぞきに行こうとしたからというのがもっぱらの噂である。しかし、近年女子制服の色が変わったのだ。マゼンダに。

新入隊員以外はモデルチェンジはない。

「隊長、経理から、被服費のことで話があるとのことですが」

「席を外していると言ってくれ」

薄桃色の隊服と、金髪をなびかせ、役職者は颯爽と歩く。

「……一体なぜですか。布地だって貴重品なんですから」

「君は」

振り返った青い瞳が細められる。

「命よりも大事なものがあると思うか？」

――その年も、新入隊員で作られる草原が広がっていた。

「あれは？」

「特別待遇なのか？髪、珍しい金髪だし」

ひそひそ話に臆することなく、背筋をぴんとはる。

黒や茶色が多い中、生まれもっての髪色でとやかく言われることには慣れている。

けれど、隊服がマゼンダとは思わなかった。

もちろん、特注にしてくれと頼んだわけではない。

「えー諸君！入隊おめでとう。君たちは人類域を守る使命を持っている。昨年は人類域が侵略され、布地の生産が減ってしまった。なかには比較的新しい中古の服や、試作品を着てもらっているものもいる。不便をかけるが、この不便を町の人たちに感じさせないよう、一丸となって任務に当たっていこう！」

お偉方のスピーチは、盛大な拍手をもってお開きとなった。

そして、草原が刈り取られるのは、一瞬だった。

「うあっ」
「きゃあっ！」
「バンパレット属の襲撃だ！」
草刈りでもしている感覚なのだろうか。ろくに戦闘訓練も受けていない新入隊員は、次々と倒れていく。
少年少女関係なく。
翼が折れていく。
そんななかで、草原に咲くマゼンダだけが、手折られることなく立っていた。
応戦しているベテラン隊員たちが目を見張る。
「……あの、新入隊員は？」
「入団試験トップの子です。まさか、教えずとも太刀打ちできているなんて……」
違う。
手加減をされている。
この、バンパレット属の少年に。
「おまえ、女の子か？」
かっとなる。
「答える必要はない！」
「おっと」
小さなバンパレット属はひょいと攻撃を避ける。
遊んでいるように。
「おまえにいいこと教えてやるよ。バンパレット属の女の子は、桃色のものを身につけるんだ。環境破壊と、住みかを追われたことで、ヴァンパレット属の女の子はほとんどいない。大事にされてるんだぜ？だからおまえがその服を着てる限り、緑のやつらみたいにぼこぼこにされなくて済むかもな」
「ばかにするな！」
「事実だろ」
攻撃が羽を散らす。
「守りたいものを守れないんなら、守ってくださいって敵に慈悲を請

うてみろ。鬼じゃないんだ。見逃すくらいはしてやるさ」
空に落ちる。
笑い顔が遠退いていく。

悔しい。
悔しい。
だけどまだ守れないから。
守る力がないから。絶対に忘れない。
この悔しさを意識するために、私はマゼンダを身に纏おう。
そして、この情報を然るべき人らに伝え、誰かが守られるようにしてもらおう。
もしも全滅するような事態になろうとも、この色が守ってくれるなら。
全員助からないなら、誰かは助かれ。
「……覚えていろ！バンパレット属」
「レオンだ。この名前、忘れるな」
レオンとバンパレット属の一団は、空の彼方へと姿を消した。

# 天使になりたかったわけ

「ありがとうございました。失礼します」
丁重に扉をしめ、ほうと息をつく。
入隊の場は襲撃でぶち壊されたが、バンパレット属が撤退したあともやるべきことは残っていた。
軽傷者を中心に、負傷者の確認、治療。
警戒強化に、今後の流れについての大まかな説明。
加えて、自身はバンパレット属と互角に戦った新入隊員という見方をされ、簡単な状況説明。
いろいろなことがありすぎた。
だから気を抜いていたのかもしれない
「おっつかっれちゃーん！」
緑のインナーシャツに包帯をぐるぐるまきにした誰かがばふりと追突してくる。
思わず一、二歩よろめいてしまう。
無言で振り返ると、ここでは珍しくない、茶髪と同じ色の瞳があった。
「え、あれ？上官？違うよね？俺はみてのとおり、さっきの入隊式にいた新人だけど」
ため息をつく。
人懐っこいというか、遠慮がないというか。
怒る気も失せた。
「うん、同期だよ」
大柄な体は、他の新入隊員よりも頭ひとつ飛び抜けていた。
「やったー！俺、ショウっていうんだ。１１歳。そっちは？」
「ミノリ。同い年」
「よかったー！俺、遠くからきたからこっちに知り合いいなくてさ、いろいろ教えてくれよな」
「あいにくだが、その期待にはこたえられないよ。私も
遠くからきたから」

出身地を口にすると、ショウは目に見えて驚いていた。
「うーわー、俺より遠いところから来たんだな。飛行船で何日かかるんだよ」
答えるより前に、会議室の扉が開く。
私たちは柱の影に隠れた。
新米のエンジェルガードが制服を返し、泣きながら頭を下げている。
そして、年かさの女性に連れられながらその場を去った。
「あれは……」
「入隊早々やめたんだろ。あれで五人目らしいけど」
「なっ……！」
まだ一日も経っていない。それなのにやめるなんて。
「無理もないっしょ、入隊式でいきなりあんなふうにバンパレットに襲われたんだから。死人がでなかったのが奇跡だってお偉いさんも言ってた」
「……だとしても、平和を守るのがエンジェルガードの仕事のはずなのに」
「覚悟ができてるか、そうでないかの違いでしょ」
ショウはゆっくりと歩きだす。私はそれについていく。
「俺、早めに会場ついたんだ。みてのとおりでかいから、みんなこわがって友達はできなかったけど、大体の事情はわかった」
「……？」
「俺やミノリは、家から通えないからエンジェルガードの寮に入るでしょ？でも、通える範囲でも新入りのうちは寮に入れるんだ」
「……それで？」
「ごはんが食べられる。これは心惹かれるでしょ」
顔がかっと熱くなる。
「食事に釣られて入隊するとでも……！」
「ミノリはさ」
声が少しだけ低くなる。
「育ちが良さそうだから、もしかしたら知らないかもしれないけれど」

心がずきりとする。
「俺が住んでた町は、いつも食べるものに困ってたよ」
ショウは大柄だった。けれど、顔にはたくさんのニキビのあとがついていた。
「俺しか試験に受からなかったけど、でも、町には１１歳に早くなりたがってるやつらがたくさんいた」
１１歳。
エンジェルガードへの入隊可能な年齢だ。
「もちろん、誰かの役に立ちたい、守りたいって思いは、みんな持ってると思うよ。だけど、エンジェルガードに入らないと生きていけないやつも、たくさんいると思う」
窓からは、さきほどの新入隊員がとぼとぼ歩いていくのが見える。
「たとえ向いてなかったとしてもさ」
夕日が沈んでいく。
影が長くなっていった。

# 天国のありか

「ミノリー、起きてるかー!?」
階下からは声変わり前のルームメイトが呼び掛けている。
元気はつらつすぎる声は、聞いていて安心感がある。
若干うるさいと言えなくもないけれど。
「聞こえてるよ、あと、もう起きてる」
私が黒のアンダーシャツ姿で顔を見せると、ショウはすでに制服に着替えていた。
「それにしても早いな」
「やりたいことも覚えなきゃいけないこともたくさんあるしな！ミノリ、朝飯前に町のようす見に行こうぜ」
土地勘のない場所で、早く地形を覚えるに越したことはない。
地図よりも実際に歩くほうがためになる。
「いいと思うけど、新入隊員が勝手な真似は……」
「外出許可は昨日のうちに二人分もらってきた！遠くまでじゃなければいいってさ」
やることが早い。
となると、私の心配は杞憂に終わりそうだ。
「じゃあ、行こうか。待って、ジャケットはおるから」
用意を済ませ、ロフトから降りる。桃色の服に、ショウは首を捻っていた。
「あれ、ミノリ、アンダーも他のみんなと色違うのな」
「みたいだね」
大多数は、濃い緑だ。
「でも、物資不足なら仕方ないよ」
「まあな」
部屋の扉をしめ、寮を出る。
見上げると、薄い青空が広がっていた。
「いい天気だな」
「ほんとに。散策にぴったりだ」

平和で、温かくて。
穏やかな場所だった。
街は賑やかで、店にはそれなりに品物がそろっている。
人々の服は質素ではあるもののみられるものであるし、子供の姿もある。
「まあまあ恵まれてるよな、ここ」
ショウの感想は間違ってはいないだろう。
贅沢をしている人間でなければ、ここは天国と思うに違いない。
「そうだな。きっと、エンジェルガード本部がある街だから」
地上から運ばれる活用可能な資材は、人々の暮らしを守るエンジェルガードが率先してサルベージしている。
よって、回収物はエンジェルガードがまず活用する。
充足したものは付近の市場に出回るのだ。
物資は常に不足しているから、遠方の町まではなかなかまわらない。届けようにも途中で消費されてしまう。
「……生まれてくる場所は、選べないしな」
なにも言えなかった。
この世界には確かに、格差が存在しているから。
「っと、そろそろ時間かな」
ショウはくるりと背を向ける。
表情は見えない。
「帰ろっか」
背中はただ1つの答え以外、拒絶しているように見えた。
「うん、帰ろう」
そうして私たちは、守るべき街や人々から、目をそらしたのだ。
私たちはエンジェルガード。
街や人々を守るべき第一線の実行部隊。
それ以前に一人の人間として、自身の心を守るために。

# 天使なんかじゃない

エンジェルガードの仕事は多岐にわたる。護衛、戦闘、人助け。物質運搬に救護活動。

つまるところ、治安・運輸・医療機関。

頼る方はなんでも頼めていいのだが、頼まれる方はというと。

「ったく、覚えることたくさんありすぎるよなー！」

盛りだくさんの内容は、仕事をしながら覚えるスタイルだ。

ノートをとる暇なんかはない。むしろ、一つ仕事が終わるか終わらないかのうちに次の仕事が入ってくるのだ。

今日もくたくたになって部屋へと帰りつく。

ショウは早速ジャケットをほうり投げていた。

「ほら、しわになるからかけたほうがいいよ」

差し出したハンガーを、ショウは寝転びながら受け取った。

「さんきゅ」

受け取りつつも、ショウは服をかける気配がない。

「まったく、ものぐさだなあ」

「ミノリがきっちりしすぎなんだよ」

口をとがらせる姿は、同い年のはずなのに弟のように思えてくるから不思議だ。

「基本ができなければなにかあったときも対応できないよ。平穏なときこそ日常的にできることをしないと」

「真面目」

「うるさい不真面目」

同室のショウは、性格や体格、なにもかも違う。

それでも仲良く接しているという自覚はあった。

金髪碧眼という、このあたりでほとんどいない容姿についても、同期の中では唯一何もいってこない。

「俺は省エネ型なの」

「ああ言えばこういうんだから」

笑いあっていたそのとき。

警報が鳴った。
「なんだ？訓練警報？」
「いや、多分違う」
廊下をばたばたと走る足音がする。
「エンジェルガード、総員戦闘準備！ヴァンパレットが街に現れた！エンジェルガード、総員戦闘準備！」
けたたましく放送が響き渡った。
ショウはさっとジャケットをつかみ、あっという間にはおる。
「ほらな、かけなくてよかっただろ？」
ミノリは黙ってハンガーからジャケットをひったくった。
錬度の浅いミノリたちは、後方部隊を言い渡された。
妥当な判断ではある。
前線は経験豊富なエンジェルガードが、殿は、前線には劣るものの、ミノリたちよりも経験があるエンジェルガードが固めている。
「私たちの役割は、前線を潜り抜けてきた手負いの始末と、急を要しない民間人の救助ってところか」
ミノリのつぶやきに、ショウは武器を握り直す。
「にしても、襲撃、多いよな。仮にもお膝元だぜ？」
「それは思う、が」
マゼンタが残像を残す。
ヴァンパレットがどさりと倒れる。
「話は後だ」
ショウは返事をする前に、別のヴァンパレットの攻撃を受け止め、カウンターを仕掛けて仕留める。
「確かに、落ち着いて話せねえや」
争いはまだ止む気配がない。
民間人を瓦礫から救いだし、ヴァンパレットの攻撃を防ぎ、そんな姿は英雄的なのかもしれない。
しかし。
一人の同期が倒れた。
ミノリがすかさず犯人を打ち倒す。

エンジェルガード。
誰かにとっての天使は。
「天使なんかじゃねえな、俺たち」
別にとっての悪魔。
相手を力にに任せて制圧する。立場は違えどかわりはない。
「だけど、それでいいよ、俺たちは」
意識を失った仲間を横たえ、ショウは地を蹴った。

# エンジェルレッスン

空気が重い。
重力発生機は一人の大人だ。
いつ止むのかは、誰も知らない。
「えー、君たちは入隊式当日から早々にヴァンパレットの襲撃を受け、鍛練に入る前から実戦を経験した特異な世代である。座学の時間が必然的に削られ、加えて適切な課題も補講も与えられなかったのは我々の責任でもあるのだがーー」
ドンっ！
教卓が叩かれ、エンジェル達の肩がびくりと震える。
「入隊後最初のテストで合格者か一人だけとは、一体どういうことだぁ!?」
大柄なショウの体でさえしおしおと小さくなっている。
ただひとり、涼しい顔をしていたのはミノリだけだった。
「エンジェルガードは入隊後、まずはクラス『エンジェル』に振り分けられる。……なあミノリー、これ以外にどう書けばいいんだよー」
エンジェルガードについての理解度テストで合格しなかった者は、レポートを書くように。
ショウはその宿題にてこずっているようだった。
「エンジェルガードのしおり見ながら書けばいいんじゃないの？資料は入隊のときにもらってるんだし」
「あんな分厚いのみてられるかよ。ミノリは見たのか？」
「一通り」
「マジでか」
くるくると回されていた鉛筆が机に落ちる。
ショウはエンジェルガード規則集を引き寄せた。
全て重ねて頭を叩くと意識を失いそうな厚さになる。
「まずさ、エンジェルガードの組織ってどうなってるかがわかんねえんだよな。新入隊員期間がエンジェルで、あとは適性に応じてクラスが別れるってのはわかるんだけど」

「そうそう、アークエンジェル、トロウンズ、プリンシパリティ、パワーズ、バーチュー、ドミニオン、セラフィム。エンジェルを合わせると全部で８つ」
「っしゃ、それを書こう」
「じゃあ、クラスが違うことで何が違う？」
「……何だっけ」
「まず、装備もクラス毎に違う。装備にはクラス毎に自分の能力を高めてくれる効果がある。例えばドミニオンは素早さ特化型。陽動や、露払い、先手必勝のミッションにアサインされることが多い。逆にバーチューは攻撃特化型。強襲作戦や、手強い敵が出てきたときに呼び出されるね。逆に、守らないといけないときはパワーズ。守備特化型のクラスだ」
「ふんふん。そういえば翼の形が違うやつがいたな」
「そうそう、翼の形が違うのが特徴。これで書けそう？」
「もうちょっと。……最強のクラスってセラフィムであってたっけ？」
「合ってる。ちなみにクラスを移る条件ってなにか知ってる？」
「志願制？」
「あたり。でも例外がひとつあって、セラフィムだけは自分からなれない」
「まあ、最強は誰かから認めてもらうんであって、自称最強で激よわだったら目もあてられないもんな」
　鉛筆の音が止んだ。
「ありがと、これでなんとかなりそうだ」
「よかった」
「にしても、クラスどうする？」
「こればっかりはわかんないけど、ショウは？」
「決まってる。俺は強くなってひとりでも多くのヴァンパレットを倒す。目指すはセラフィムだ！」
「たぶん座学の成績も見られると思うよ」
「うげ！」

なにもない、1日だった。
なにかある日から振り返れば、平和だと思えたくらい。